第三十六講　救の完成（三）　第八章一節―十一節の研究（一月十五日）

八章の一節より十一節までを研究するについて、先づ一言すべきは其各節について精密なる研究をする事の殆ど不可能であると云ふ事である、優秀なる幾多の學者が各節各語の解釋について種々の異なつた意見を提出して居る有様である、其中の一を採ると云ふ事は可成り難しくあり、更に別に獨創的の解釋を提出すると云ふ事は尚更困難である、しかし聖書の言である以上、信仰を以て見ればその大様の意味は誰にでも解るのである、又各節が大切なる深き眞理を語つてゐて一節として重要ならぬはない、恰も寶石の山に入りしが如くである、もし我等がパウロの心を我心として、彼の立場に立て眺むる時は、どの節を取りて究むるも彼の思想の中心に達する事が出來、もし斯く一節を能く究むれば他の節も自然と割合にたやすく理解せらるゝのである、フィリップ・ブルックスの言として、「地上何れの點より掘るも垂直に掘れば地球の中心に達す」と云ふ語がある、此の箇所の如き何れの一節を取りても、之を深く深く掘ればパウロ思想の中心に達するのである。

第一節の意味は前講に於て說いた通り頗る重要である、キリストに在る者は罪せられずと云ふは實に大なる福音的眞理である、次に二節三節四節……と十一節まで順次に各節について考へよ、各節ともに半ば解りし如く半ば解らざるが如き感を免かれない、そこに眞理は隱見するけれども其本體を明確に摑んだと云ふ感じが起りにくい、併し乍らパウロの心を我心として眞面目なる思考を加へ、且自己の實驗に照らして之等の各節を解せんと努むる時は、其大意を摑むことは決して不可能ではないのである。

比較的解しやすき節としては第五、六節の如きがある、まづ五節には「肉に從ふ者は肉の事を念ひ靈に從ふ者は靈の事を念ふ」とある、各語の正確なる意味については諸說あるとするも其大意は誰人にも略ぼ明かである、實に肉に從ふものは肉の事のみを思ふ、今や世の問題は概ね物質上の問題である、社會改造の問題と云ひ、經濟政策の問題と云ひ、文化生活の問題と云ふも概ねこれ衣食住の問題である、併し乍ら國家としても又個人としても肉の事をのみ思ふは、死——滅亡——を惹き起すことである、史上の國にして何等國家に大精神、大理想なくして唯富國強兵等の物質的方面にのみ走りしものは、孰れも遂に亡滅若しくは衰頽の悲運を招かぬはない、強固なる主義、正大なる精神なくして國は興り又立たぬのである、個人も亦同樣である、故に六節にあるが如く「肉の事を念ふは死なり、靈の事を念ふは生なり安なり」である、靈の事を念ふて生命と平安とは自づから充盈し來るのである、國家然り、社會然り、個人然り、これ史上の事實また個人實驗上の事實である。

次に十、十一節の如きを見よ、その如何に崇高なる眞理の提示なるかは一讀して明かである、「もしキリスト汝等に住まば體は罪によりて死に靈魂は義によりて生きん」とある、キリストの靈我等に住めば肉體は罪の故に死するも靈魂は永へに生くると云ふのである、しかも十一節に至れば說明は一步進みて、神は其靈を以て「汝等が死ぬべき身體をも活かすべし」と云ふ、卽ち復活である、これ皆基督者に宿る聖靈の働きに因るのである、永遠の生、永生への復活——それをパウロは確言し、主張し、高唱するのである、げに貴重なる眞理の提示と云ふべきである。

その他の各節を解するに當つて注意すべきはパウロの言が論理的でなくして、重疊的であると云ふ事である、

近代人の文は論理と分析を特色とし凡て正しき連絡を保ちて記される、然かるにパウロやヨハネは論理に頓着せずして、心中に潜む眞理を續々として纍積的に注ぎ出す、乙は甲の上に重なり丙は乙の上に重なり、層々相重なりて見る者をして眩(まばゆ)からしむる、これ聖書に於て初代教會の偉大なる文字に接する時に忘るべからざる事である。

第一節には二つの大きい觀念がある、第一はキリストイエスにある事卽ちキリストと合體する事、第二は斯かる人は罪せらるゝ事なしとの事である、或意味に於て八章全體は此の二大觀念の敷衍であるとも云ひ得る、キリストに在る事と云へば卽ちキリストの靈（聖靈）が信者に宿れる事である、そして聖靈の信者にありての働きは實に八章の力をこめて說明する主眼點である、又罪せらるゝ事なしとは恩惠の消極的半面ではあるが、消極は當然進んで積極に至るべきものであつて、此消極より積極への恩惠の進展は卽ち八章の主題であるとも云ひ得る、故に八章全體は實にその第一節を引きのばしたものであるとも云ひ得る、從つて二節以下の各節は凡て第一節の說明であるとも云ひ得るのである。

まづ第二節の意味は如何、「そは活かす靈の法(のり)はイエスキリストに由りて罪と死の法より我を釋(ゆる)せばなり」と云ふ、これ第一節の「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」の理由として揭げられし語である、されば第一節の語に對しては前講の如く七章六節が理由となつてゐると共に、此の第二節も亦理由となつて居るのである、「罪と死の法」と云ふ、法とは何を云ふか、此場合は律法(りつ)の意ではなく、一の方則、一の原理を意味するのであるが今これを權能(けん)と見るが、解釋上には最も便利である、罪と死との權能ほど人を力強く把握してゐるものはない、人の生涯は罪を犯しつゝ死を前に望む恐怖の生涯である、罪の苦悶と死の恐怖と、この二つは人が墓まで携

へゆくべき道連（みちづれ）である、免かれんとして免かれ得ざる恐るべき運命よ！げに「罪と死の法」は人をしかと抑へて身動きも出來ぬやうにして居るのである、此の恐るべき法、この拂ひのけ難き權能、これより免かるゝ道が何處かにあるであらうか、罪を脫し死を免かるゝ道あるか如何に、これ寔に人生の至難なる問題である。

而して此問題に對して第二節は答を與へてゐるのである、「キリストイエスにある生命（いのち）の御靈（みたま）の法は汝を罪と死との法より解放したればなり」（改譯聖書）と、現行譯よりは改譯の方が正確である、但し此文の目的格を「汝を」とすべきか「我を」とすべきかは原本に依て相違せるため容易に定め難いのである、併し「汝を」でも「我を」でも「我等を」でも此節の主意には別段の影響はない、注意すべきはパウロが「解放したればなり」と云ひて之を過去の事として記せる點である、パウロは茲に我（又は人）の實驗として此事を記したのである、罪と死との權能より免かるゝは唯「キリストイエスにある生命の御靈（みたま）の法」に依る、この御靈の法が我（又は人）を死と罪との法より解き放つたと云ふのである。

實驗の語を理解するには實驗に訴へるを最上の道とする、余は曾て罪と死との苦悶の中に懊惱（おうのう）の幾年月かを送つたものである、罪と死とは放たじと余を抑へていた、然るに遂にキリストの十字架を仰ぎ瞻るや　不思議に此恐るべき罪と死との權能より免かれた、苦悶は失せ、罪と死との壓迫は去り、歡喜と自由は一身にみなぎるに至つた、その理由は充分に解し難い、しかし其事實は空に日の照る如く明かである、この實驗に照らして第二節に對する時は、別に何等の思考を要せずして、第二節の語が其儘に自然と味得せらるゝのである。

然りキリストの十字架の贖罪力に觸るゝとき人は誰人も罪と死よりの釋放を味ふのである、併し乍ら「キリス

トイエスにある生命の御靈の法」とありて、茲に聖靈の働きが記されて居るのに注意せねばならぬ、聖靈は卽ちキリストの靈である、又生命の御靈である、このキリストの靈が人の心に入るや罪と死の權能は如實に心中より驅逐せられる、之實驗上の事實である、美しき情感、けだかき思想を傳ふる所の詩文を讀むとき、人は一時なりとも感激に心の淨化せらるゝを感ずる、此世の詩人文士の靈すら一時なりとも人を淨める、ましてキリストの靈の人に及ぼす力幾許(いくばく)ぞ、彼の靈、一度人の心に入るや聖淨(きよき)の靈なるが故に罪の法を排除し生命(いのち)の靈なるが故に死の權能を驅逐する、あゝ人よキリストの靈を受けよ、然らば我を抑へゐたる罪の力はもはや我に對する支配力を失ひ、我を脅(おびやか)しゐたる死の權能は失せて永への生命の我前途に無限に開展せるを感ずるであらう、蘇國(スコットランド)の神學者チャルマズは「新き愛の排逐力」(Expulsive power of new affection)なる語を用ひた、新しき愛が入れば舊き愛はおのづと排逐せられる、此世とその物とに對する愛欲が人の心を占領して彼をして罪と死との法に服せしめてゐる、そこにキリストの靈來たれば新しき神の國の愛は此の罪の愛を排(お)し斥(しりぞ)ける、これ自然の順序である、故に曰ふキリストイエスにある生命の御靈の法は罪と死との法より我（又は汝）を釋放したりと。

「それ律法は肉によりて弱く、その能はざる所を神は爲し給へり」と三節前半は言ふ、律法そのものは聖且義ではあるが、肉が人を抑へ居る故律法の義は行はれない、卽ち人が肉に妨げられ居る故律法は無力たらざるを得ないのである、茲に於て神は律法の能はざる所を他の方法を以て爲し給ふたのである、然らば如何なる方法ぞ、三節後半は言ふ「卽ち己の子を罪の肉の形となして罪のために遣はし肉に於て罪を罰しぬ」と、これ彼が其獨子を人の形となして世に遣はし、人の罪を罰する代りに彼を罰し、以て人の罪を處分し彼の死を以て贖ひとなし、

而して人はたゞ彼を信じ彼を仰ぎさへすれば罪を赦されて義とせらるゝの道を開き給ふた事を云ふのである、これ羅馬書が三章、四章、五章等に於て極力主張した十字架の福音の反覆である。

併し乍ら十字架の受難は單なる贖罪の爲のみではない、彼の死と復活と昇天とありて聖靈人に臨むに至り、人は此聖靈を宿すために、我の故ならで聖靈の故に力を得て律法の義を行ひ得るに至るのである、されば、獨子の受難は人をして義を實現せしむるの道を拓いたのである、これ第四節の言ふ所である、卽ち「これ肉に從はず靈に從ひて歩む我等の中に律法の義の完うせられん爲なり」（改譯聖書）とある、げに「靈に從ひて歩む生活」（聖靈を心に宿して其力に導かれて歩む生活）は主の十字架を源として流れ出でしものである。

以上を以て一節より四節までの研究を終る、さて茲に一言すべきは罪の問題である、外に現はるゝは個々の罪の行であるが、その源は心の底に深く横（よこた）はる汚敗である、後者ありての前者である、前者ありての後者ではない、然るに普通の人は罪の行が源であつて其れを重ねし結果心に汚敗が臨んだと云ふ、之に對してパウロは心の底に横はる汚敗が罪の行の源であると云ふ、そして此汚敗の源は神よりの離絶であると云ふ、別言すれば神よりの離絶があるため心の汚敗があり、心の汚敗があるため罪の行があるのである、寔に或人の云ひし如く先づdisruption（ディスラプション）（分離―神よりの分離）ありしためにcorruption（コラプション）（汚れ、心の腐敗）が起りcorruption（コラプション）起りし爲にeruption（エラプション）（爆發―罪の爆發―心の汚れが出口を見出して外に爆發せしもの卽ち個々の罪）が起るのである。

故に人を罪より救ふ道はその源に遡つて神との離絶を恢復（かいふく）して先づ神と和（やわら）がしむるに在る、然る時は自然と心の腐れが醫（いや）され、心の腐れが醫さるゝ時は自然と罪の行より遠ざかるのである、福音の救濟法は實にこれである、

末に走つては努力奮闘も效果がない、源に至つて初めて事績は擧がる、人に神を示し、人をして神との離絕を恢復せしめ、人をして神に和がしむるが福音の救濟である、故に最も有效なる最も徹底せる救濟である、何故キリストは十字架に死するの決心をなせしか、何故神はその獨子を世に降して之を十字架の犧牲とせしか、そは斯くしてのみ神と人とが和ぐに至るからである、十字架を通してのみ人の神よりの離叛が醫さるゝからである、そして此源を正す事に依てのみ末なる罪が除かれるからである、人が神に立ち歸るため、人と神とが一致するため、聖靈が人に降るため、卽ち罪が除かれ人が救はれんためには此十字架の窄き路より外に路はないからである、然るに世人は此最も根本的なる救濟を棄てゝ徒らに末にのみ走つてゐる、然し乍ら十字架の源を以てせずしては到底人は救はれないのである。

第三十六講約說

死より免かるゝ事

○若し聖書を寶の倉庫に譬ふべくば羅馬書、殊に其第八章は之を寶玉の匣に比ぶる事が出來る、其內に金剛石あり、黃玉あり、綠玉あり、靑玉ありて、其孰れを以てするも富を作し貴きに達する事が出來る、其各節が眞理の珠玉である、其孰れを取るも以て長講演の題目となす事が出來る。第一節「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」云ふが如き、第六節の「肉の事を念ふ死なり云々」と云ふが如き、第十節「キリスト汝等に在らば體は

罪に因りて死云々」と云ふが如き、孰れも信仰上の大眞理であつて、之を委しく說明するは容易の事でない、寶貨は積みて山をなす、其孰れよりして評價を始めて宜しきや其途に窮するのである。

○パウロの文體は……ヨハネ其他の聖書記者の文體も同樣である……現代人のそれとは違ひ論理的でなくして累積的である、一個の眞理を順序的に叙述するのでなくして、一つの眞理の上に他の眞理を積累ねて連續的に感得せしむるのである、恰かも夏の雲を望むが如くであつて、曇々として重巒を望むの觀を呈す、之を一節より十一節までに於て見るに贖罪の眞理、清潔の眞理、聖靈の眞理、復活の眞理が相重なりて提示せらるゝのである、パウロは神の使者として權威を以て殆んど威壓敵に我等に臨むのである、而して我等は先づ其孰れに接して之に應へん乎、其途に苦しむのである、彼の言辭は餘りに重く、其意味は餘りに濃厚にして、其攝取と消化とに讀者は甚く困しめらるゝのである。

○斯かる場合に於て何人も同時に其全部を咀嚼し消化する事は出來ない、其一節一句丈けで充分である、而して其一節を深く窺めて全篇を貫く中心眞理に達する事が出來る、恰かも地球の表面何れの地點より穴を穿つも之を四千哩の深さにまで掘鑿すれば終に地球の中心に達すると同じである、試に第一節を其終極まで究むれば福音の中心的眞理に達する、第六節、第十節皆な同樣である、必要なる事は我等各自がパウロ氣分になる事である、我等各自がパウロと共に心を福音の中心點に置くならば、彼の言辭がすべて我有となりて其意味は註解を俟たずして明瞭になるのである。

○第一節を見る其内に二個の大切なる眞理が示されてある、其第一は「キリストに在る者」と云ふ事、第二は「罪

せらるる事なし」と云ふ事である、キリストに在るとは彼と同身同體となる事である、我れ彼に在り彼れ我に在ると云ふ狀態に入る事である、故に九節に於て「神の靈汝等に住まば」と云ふも、「キリスト汝等に在らば」と云ふも、又十一節に於て「イエスを甦らし者の靈汝等に住まば」と云ふも、其意味は「キリストに在る者」と云ふと異ならない、信者はキリストに在る者であつて、同時に又キリストが其靈を以て其内に住み給ふ者である、「キリストに在る者」と云ふ言辭の内に聖靈内在の眞理の一面が明かに示されてあるのである。

○「罪せらるゝ事なし」云ふが第一節の示す所の第二の福音的大眞理である、「罪せらるゝ事なし」とは救拯の消極的半面である、然し救拯其物を示す言辭なるは明白である、而して其積極的半面を云ふた者が第六節の「生」又「安」である、第十節の「靈魂は義に緣りて生きん」とある其事である、第十一節の「汝等が死ぬべき身體をも生すべし」とある其事である、其他後節に於て神の子と成る事、キリストと共に世嗣となる事も其内に含まれて在るのである、斯くして「罪せらるゝ事なし」と云ふは大なる廣き言辭である、神がキリストを以て下し給ひし恩惠の全部が其内に含まれてあるのである。

○如斯くに解して第一節を以て第八章全體の題目として見る事が出來る、殘る三十八節は此一節の敷衍又は註解とも見る事が出來る、「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」と云ふ、我れ信仰を以てキリストに在り、キリスト聖靈を以て我内に宿り給ひて我は義とせられ、淨められ、終に復活して救拯を完成せらると云ふのである。

○茲に一節以下四節までの意繹を紹介する。

以上に述べ來りし所に由れば、クリスチヤン卽ちキリストイエスに在る者は今や罪に定められゝと云ふ 事あるなし、而して更らに尚ほ他の理由を述べて言はんに、キリストイエスに在る生命の靈の働らきは罪と死との働らきより我を解放したり、其理由如何となれば律法の無能なる所、卽ち肉の故に弱き所を神は實行し給へり、卽ち其獨子を罪の肉の形にて罪祭の犧牲(いけにえ)として遣(おく)り、其内に於て罪を罰し給へり、これ律法の義の我等クリスチヤンに於て成就せられん爲なり。

○第二節は聖靈の聖化力を示したる言辭である、聖化力は聖靈のみではない、信仰其物が大なる聖化力である、キリストの御生涯も亦大なる聖潔の能力である、我等はキリストを仰瞭(あをぎみ)て、信仰的にも實行的に聖められゝのである、然し乍ら聖潔は最も徹底的に聖靈の降臨に由て實行せらるゝのである、キリストイエスに由る活かす靈が信者に臨んで彼の内に働く死と罪とが驅逐せらるゝのである、有名なる蘇格蘭[スコットランド]の說教師ドクトル・チャルマーが日ひし通りである、Expulsive power of new affections(新らしき愛情の驅逐力)と、聖き活す神の靈が心に臨む時に死せる罪の靈は驅逐せられて、信者は後者の束縛より釋放せらるゝのである、茲に「法(のり)」とあるは「權能」と解すべきである、權能は法に必ず附隨する者である、此場合に於ては生命の靈の權能に由りて罪と其結果たる死との權能より釋(ゆる)されたりと解して意味は明白になる、又釋さる(現在)ではない、釋されたり(過去)である、パウロは過去に於て或る明確なる實驗として聖靈の降臨に由る罪念消滅の恩惠に與つたのである。

○第三節四節は難解の二節である、言辭は簡短であつて意味は深遠である、之を悉く解釋するに福音全部の說明が必要である、キリストの受肉、其受難、復活、昇天の意味を明かにして此兩節の意味が判明(わか)るのである、而し

て今茲に斯かる說明を爲すことは出來ない、又爲すの必要はない、然し斯かる說明を爲さずとも其根本の意味を探るの途は在ると思ふ、基督教は罪を如何に觀る乎、其事が判明つて是等兩節の意味が判明ると思ふ、有名なる英國の說教師ドクトル・ジヨエツトの言を藉りて言ふならば罪はeruption（爆發）であり、corruption（腐敗）であり、disruption（分裂）である、罪は惡の外に爆發した者である、然し乍ら其原因は內なる心の腐敗にあり、而して腐敗にも亦原因がある、それは分裂である、神に對する人の關係が分裂して茲に心の腐敗が始まつたのである、故に罪を去らんと欲せば腐敗を除かざるべからず、腐敗を除かんと欲せば神の分離（父子の關係の分裂）を正さゞるべからず、罪の原因を茲に發見せずして、其刈除を講ずるも無益である、而して神が其子を罪の肉の形となして罪祭の犧牲として遣はし、其肉に於て罪を罰し給へると云ふは罪を其根本に於て絕たん爲であつたに相違ない、神の取り給ひし此途の說明は之を爲すに難くある、然し乍ら其目的の茲に在つた事、而して之に由て我等の罪が實際的に其根本に於て絕たるゝ事は信者の實驗として疑ふの餘地がない、キリストの御生涯に由て神と人との關係が正され、茲に兩者の間に交通の途が開かれキリストを通うして生ける神の靈が死せる人に傳はり其結果として人が罪と死とより免かるゝに至ると云ふのが基督教の根本的教義である、而して此教義を明白に且簡潔に傳へた者が羅馬書八章三節四節である、難いと云へば難くある、深いと云へば深くある、然し乍ら福音の眞理の明白なる記述として意味最も明瞭である、茲にパウロが記した言辭其儘が大眞理である、之を解し得ないのは、言辭が解し難いからでない、我等の心が罪に汚れて其明白なる意味を受取り得ないからである、聖靈に從ふ者の眼には一目瞭然たるべきである。

○人は神を離れて罪の状態に於て在つた、キリストは二者の間に入り、其分裂を癒し、神が人に臨み、人が神に詣(いた)るの道を開き給ふた、茲に於てか神の靈が人に通じて人は神の聖旨(みこころ)を行ひ得るに至つたのである。

第三十六講　救の完成（三）　第八章一節―十一節の研究　現代語訳

八章の一節から十一節までを研究するにあたって、まず一言すべきは、その各節について精密な研究をすることはほとんど不可能であるということだ。優秀な多くの学者が、各節や各言葉の解釈についてさまざまな異なった意見を提出している状態である。そのうちの一つを選ぶことはかなり難しく、さらに別に独自の解釈を提出することはなおさら困難だ。しかし、聖書の言葉である以上、信仰をもって見れば、その大体の意味は誰にでも分かる。また、各節が大切な深い真理を語っていて、どの節も重要でないものはない。まるで宝石の山に入ったかのようだ。もし私たちがパウロの心を自分の心とし、彼の立場に立って眺めるなら、どの節を取り上げて研究しても、彼の思想の中心に達することができる。もしこのように一節をよく研究すれば、他の節も自然と比較的簡単に理解されるのだ。フィリップ・ブルックスの言葉として、「地上のどの点から掘っても、垂直に掘れば地球の中心に達する」という言葉がある。この箇所のようなどれか一節を取り上げても、これを深く深く掘り下げれば、パウロの思想の中心に達するのだ。

第一節の意味は前回の講義で述べたとおり非常に重要だ。「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してない」というのは、実に大きな福音的真理だ。次に、二節、三節、四節……と十一節まで順次に各節について考えてみるとよい。どの節も半分分かったような半分分からないような感じを免れない。そこに真理は見え隠れするけれども、その本体を明確につかんだという感じが起こりにくい。しかしながら、パウロの心を自分の

心としてまじめな思考を加え、かつ自分の体験に照らしてこれらの各節を理解しようと努める時は、その大意をつかむことは決して不可能ではないのだ。

比較的理解しやすい節としては、第五、第六節がある。まず五節には「肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます」とある。各言葉の正確な意味については諸説あるとするも、その大意は誰にもほぼ明らかだ。実に肉に従う者は肉のことばかりを思う。今や世の中の問題はおおむね物質上の問題だ。社会改造の問題と言い、経済政策の問題と言い、文化生活の問題と言うも、おおむねこれらは衣食住の問題だ。しかしながら、国家としてもまた個人としても肉のことばかりを思うのは、死――滅亡――を引き起こすことだ。歴史上の国で、国家に大きな精神や大きな理想がなく、ただ富国強兵などの物質的方面にばかり走ったものは、いずれもついに滅亡または衰退の悲運を招かないものはない。強固な主義、正大な精神なくして国は興り、また立つことはできないのだ。個人もまた同様だ。ゆえに、六節にあるように、「肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です」となる。霊のことを思えば、いのちと平安とは自ずから満ちあふれてくる。国家もそうであり、社会もそうであり、個人もそうだ。これは歴史上の事実であり、また個人の体験上の事実だ。

次に、十、十一節を見てほしい。それがどれほど崇高な真理の提示であるかは、一読して明らかだ。「キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなっています」とある。キリストの霊が私たちの内に住めば、肉体は罪のゆえに死ぬものの、霊は永遠に生きるということだ。しかも十一節に至れば説明は一歩進んで、神はその霊によって「イエスを死者の中からよみがえらせた方の

御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいます」と言う。すなわち復活だ。これらはみなクリスチャンに宿る聖霊の働きによるものだ。永遠の生、永遠のいのちへの復活――それをパウロは確言し、主張し、高らかに語るのだ。実に貴重な真理の提示と言うべきだ。

その他の各節を解釈するにあたって注意すべきは、パウロの言葉が論理的ではなく、積み重ね的であるということだ。近代人の文章は論理と分析を特色とし、すべて正しいつながりを保って書かれている。しかしながら、パウロやヨハネは論理にこだわらず、心の中に潜む真理を次々と積み重ねるように注ぎ出す。乙は甲の上に重なり、丙は乙の上に重なり、層々と重なり合って、見る者をまばゆくさせる。これは聖書において、初代教会の偉大な文字に接する時に忘れてはならないことだ。

第一節には二つの大きな観念がある。第一はキリスト・イエスにあること、すなわちキリストと一体となることである。第二はそのような人は罪に定められることはないということである。ある意味において八章全体はこの二大観念の言い換えであるとも言い得る。キリストにあることと言えば、すなわちキリストの霊（聖霊）が信者の内に宿っていることだ。そして、聖霊の信者の内での働きは、実に八章で力を込めて説明する主眼点だ。また、罪に定められることはないとは、恵みの消極的な側面ではあるが、消極は当然進んで積極に至るべきものであって、この消極から積極への恵みの進展こそ八章の主題であるとも言い得る。ゆえに、八章全体は実にその第一節を引き伸ばしたものだとも言い得る。したがって、二節以下の各節はすべて第一節の説明であるとも言い得

るのだ。

まず第二節の意味はどうだろうか。「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです」と言う。これは第一節の「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」の理由として掲げられた言葉だ。それゆえ、第一節の言葉に対しては前回の講義のように七章六節が理由となっているとともに、この第二節もまた理由となっているのだ。「罪と死の法」と言うが、法とは何を言うか。この場合は律法の意味ではなく、一つの法則、一つの原理を意味するのだが、今これを権能と見るのが解釈上は最も便利だ。罪と死の権能ほど、人を力強く把握しているものはない。人の生涯は罪を犯しつつ、死を前に望む恐怖の生涯だ。罪の苦悶と死の恐怖、この二つは人が墓まで携えていくべき道連れだ。逃れようとして逃れられない恐るべき運命よ！実に「罪と死の法」は人をしっかりと押さえて、身動きもできないようにしているのだ。この恐るべき法、この払い除けがたい権能、これより逃れる道がどこかにあるだろうか。罪を脱し、死を免れる道があるかどうか。これこそ人生の至難な問題だ。

そしてこの問題に対して第二節は答えを与えている。「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです」と。現行訳よりは改訳の方が正確だ。ただし、この文の目的格を「あなたを」とすべきか「私を」とすべきかは原本によって相違するため、容易に定めることはできない。しかし「あなたを」でも「私を」でも「私たちを」でも、この節の主意には別段の影響はない。注意すべきは、パウロが「解放したからだ」と言って、これを過去のこととして記している点だ。パウロはここに私（または人）

の体験としてこの事を記したのだ。罪と死の権能より免れるのは、ただ「キリスト・イエスにある生命の御霊の法」によるものだ。この御霊の法が私（または人）を死と罪の法から解き放ったというのだ。

実験（信仰を実際に生きて試してみること）という言葉を理解するには、実験に訴えるのが最上の道だ。私はかつて罪と死の苦悶の中に、悩み苦しむ幾年月を送ったものだ。罪と死は放さまいと私を押さえていた。しかし、ついにキリストの十字架を仰ぎ見るや、不思議にこの恐るべき罪と死の権能から逃れた。苦悶は消え、罪と死の圧迫は去り、歓喜と自由が一身に満ちあふれるに至った。その理由は十分に解しがたいが、その事実は空に日が照るように明らかだ。この体験に照らして第二節に対するときは、別に何の思考も要せずして、第二節の言葉がそのまま自然と味わい知られるのだ。

しかり、キリストの十字架の贖罪力に触れるとき、人は誰でも罪と死からの解放を味わうのだ。しかしながら、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法」とあって、ここに聖霊の働きが記されていることに注意しなければならない。聖霊すなわちキリストの霊であり、また生命の御霊だ。このキリストの霊が人の心に入るや、罪と死の権能は如実に心の中から駆逐される。これは体験上の事実だ。美しい情感、高貴な思想を伝える詩文を読むとき、人は一時なりとも感激によって心が浄化されるのを感ずるものだ。この世の詩人や文士の霊すら一時なりとも人を清めるのだから、ましてキリストの霊が人に及ぼす力はどれほどだろうか。彼の霊は、一度人の心に入るや、聖い霊であるゆえに罪の法を排除し、いのちの霊であるゆえに死の権能を駆逐する。ああ、人よ、キリストの霊を受けなさい。そうすれば、私を押さえていた罪の力はもはや私に対する支配力を失い、私を脅かして

いた死の権能は消え去って、永遠のいのちが私の前途に無限に展開していくのを感ずるだろう。スコットランドの神学者チャルマーズは「新しい愛情の駆逐力」(Expulsive power of new affection)という言葉を用いた。新しい愛が入れば古い愛はおのずと駆逐される。この世とその物に対する愛欲が人の心を占領して、彼に罪と死の法に服従させている。そこにキリストの霊が来れば、新しい神の国の愛はこの罪の愛を押し退ける。これは自然の順序だ。ゆえに、「キリスト・イエスにある生命の御霊の法は罪と死の法より我を解放した」と言うのだ。

「肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました」と三節前半は言う。律法そのものは聖くかつ義ではあるが、肉が人を抑えているゆえに律法の義は行われない。すなわち、人が肉に妨げられているゆえに、律法は無力とならざるを得ないのだ。ここにおいて神は律法の行えないところを他の方法によってなされたのだ。それではどのような方法か。三節後半は言う。「神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです」と。これは、神がその独り子を人の形として世に遣わし、人の罪を罰する代わりに彼を罰し、もって人の罪を処分し、彼の死を贖いとなし、そして人はただ彼を信じ、彼を仰ぎさえすれば罪を赦されて義とされる道を開いてくださった事を言うのだ。これはローマ書が三、四、五章等において極力主張した十字架の福音の反復だ。

しかしながら、十字架の受難は単なる贖罪のためのみではない。彼の死と復活と昇天があり、聖霊が人に臨むに至り、人はこの聖霊を宿すために、自分のゆえではなく聖霊のゆえに力を得て、律法の義を行うことができるに至るのだ。それゆえ、独り子の受難は人が義を実現するための道を切り開いたのだ。これは四節の言うところ

だ。すなわち、「それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです」とある。実に「霊に従って歩む生活」（聖霊を心に宿してその力に導かれて歩む生活）は、主の十字架を源として流れ出たものだ。

以上をもって一節から四節までの研究を終わる。さて、ここでまず触れておかなければならないのは、罪の問題である。外に現れるのは個々の罪の行いだが、その源は心の底に深く横たわる汚濁だ。後者があっての前者であり、前者があっての後者ではない。しかし、普通の人は罪の行いが源であって、それを重ねた結果として心に汚濁が臨んだと言う。これに対してパウロは、心の底に横たわる汚濁が罪の行いの源であると言う。そして、この汚濁の源は神からの離絶であると言うのだ。言い換えれば、神からの離絶があるために心の汚濁があり、心の汚濁があるために罪の行いがあるのだ。実に、ある人が言ったように、まず分離があったために汚れや心の腐敗が起き、それが起きたために罪の爆発――心の汚れが出口を見出して外に爆発したもの、すなわち個々の罪が起きるのだ。

ゆえに人を罪から救う道は、その源に遡って神との離絶を回復し、まず神と和解させることにある。その時は自然と心の腐れが癒やされ、心の腐れが癒やされる時は自然と罪の行いから遠ざかるのだ。福音の救済法は実にこれだ。末端に走っては努力奮闘も効果がない。源に至って初めて事績が挙がる。人に神を示し、人に神との離絶を回復させ、人に神と和解させることが福音がもたらす救済だ。ゆえに、最も有効であり、最も徹底した救済だ。なぜキリストは十字架に死ぬ決心をしたのか。なぜ神はその独り子を世に下してこれを十字架の犠牲とした

のか。それは、このようにしてのみ神と人とが和解するに至るからだ。十字架を通してのみ、人の神からの離反が癒やされるからだ。そして、この源を正すことによってのみ、末端の罪が取り除かれるからだ。人が神に立ち帰るため、人と神とが一致するため、聖霊が人に下るため、すなわち罪が除かれて人が救われるためには、この十字架の道以外に道はないのだ。しかしながら、世人はこの最も根本的なる救済を捨てて、むやみに末端にばかり走っている。しかしながら、十字架の源によらなければ、到底人は救われないのだ。

第三十六講約說

死から免れること

○もし聖書を宝の倉庫にたとえるならば、羅馬書、ことにその八章はこれを宝玉の箱に比べることができる。その中にダイヤモンドがあり、トパーズがあり、エメラルドがあり、サファイアがあり、そのどれをもってしても富を得て貴い者に至ることができる。その各節が真理の珠玉だ。そのどれを取るも長講演の題目とすることができる。第一節の「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」というようなもの、第六節の「肉の思いは死ですが…」というようなもの、第十節の「キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても…」というような箇所は、いずれも信仰上の大きな真理であって、これを詳しく説明することは容易なことではない。宝貨は積もって山をなしており、そのどれから評価を始めてよいか、そ

の道に窮するのだ。

○パウロの文体は――ヨハネその他の聖書記者の文体も同様だが――現代人のそれとは違い、論理的ではなく積み重ね的だ。一個の真理を順序的に記述するのではなく、一つの真理の上に他の真理を積み重ねて連続的に感得させるのだ。あたかも夏の雲を望むかのようであって、重なり合って山々を望むの観を呈する。これを一節から十一節まで見ると、贖罪の真理、清潔の真理、聖霊の真理、復活の真理が重なり合って提示されるのであって、パウロは神の使者として権威をもって、ほとんど威圧的に私たちに臨むのである。そして私たちはまずそのどれに接してこれに答えようか、その道に苦しむのだ。彼の言葉はあまりに重く、その意味はあまりに濃厚であって、その摂取と消化とに読者は大いに苦しめられるのだ。

○このような場合において、誰も同時にその全部を咀嚼し消化することはできない。その一節一句だけで十分だ。そしてその一節を深く極めて全篇を貫く中心真理に達することができる。あたかも地球の表面のどの地点から穴を穿つも、これを四千マイルの深さにまで掘削すればついに地球の中心に達するのと同じだ。試しに一節をその終極まで究めれば、福音の中心的真理に達する。第六節、第十節もみな同様だ。必要なことは、私たちがパウロの気分になることだ。私たちがパウロと共に心を福音の中心点に置くならば、彼の言葉がすべて自分のものとなり、その意味は注解を待たずして明瞭になるのだ。

○第一節を見ると、その中に二つの大切な真理が示されている。その第一は「キリストにある者」ということ、第二は「罪に定められることはない」ということだ。キリストにあるとは、彼と同身同体となることだ。我れ彼

に在り、彼れ我れに在るという状態に入ることだ。ゆえに九節において「神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」と言うのも、「キリストがあなたがたのうちにおられるなら」と言うのも、また十一節において「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら」と言うも、その意味は「キリストにある者」と言うのと異ならない。信者はキリストにある者であって、同時にまたキリストがその霊をもってその内に住んでおられる者だ。「キリストにある者」という言葉の内に、聖霊内住の真理の一面が明らかに示されているのだ。

○「罪に定められることはない」というのが一節の示すところの第二の福音的大真理だ。「罪に定められることはない」とは救済の消極的側面だ。しかし救済そのものを示す言葉であることは明白だ。そしてその積極的側面を言ったものが、六節の「いのち」また「平安」だ。十節の「御霊が義のゆえにいのちとなっています」とあるその事だ。十一節の「あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいます」とあるそのことだ。その他、後の節において神の子となること、キリストとともに相続人となることもその内に含まれている。このように「罪に定められることはない」というのは大いなる広い言葉だ。神がキリストをもって下さった恵みの全部がその内に含まれているのだ。

○このように解して、一節を八章全体の題目として見ることができる。残りの三十八節はこの一節の敷衍または注解とも見ることができる。「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」と。私は信仰をもってキリストにあり、キリストは聖霊をもって私の内に宿り給い、私は義とされ、清められ、ついに復活

して救済を全うされるというのだ。

○ここに一節以下四節までの意訳を紹介する。

以上に述べてきたところによれば、クリスチャン、すなわちキリスト・イエスにある者は、今や罪に定められるということはない。そしてさらになお他の理由を述べて言うならば、キリスト・イエスにある生命の霊の働きは、罪と死の働きから私を解放した。その理由はどういうことかといえば、律法の無能なところ、すなわち肉のゆえに弱いところを、神は実行してくださいました。すなわち、その独り子を罪の肉のかたちとして罪祭の犠牲として送り、その内に於いて罪を罰してくださいました。これは律法の義が私たちクリスチャンにおいて成就されるためだ。

○第二節は聖霊の聖化力を示した言葉だ。聖化力は聖霊のみではない。信仰そのものが大きな聖化力だ。キリストの御生涯もまた大きな聖潔の能力だ。私たちはキリストを仰ぎ見て、信仰的にも実践的にも聖められるのだ。しかしながら聖潔は、最も徹底的に聖霊の降臨によって実行されるのだ。キリスト・イエスによる、いのちを与える霊が信者に臨んで、その内に働く死と罪が駆逐されるのだ。有名なスコットランドの説教者ドクター・チャルマーズが言った通りだ。「新しい愛情の駆逐力」と。聖く命を与える神の霊が心に臨む時に、死んだ罪の霊は駆逐されて、信者は後者の束縛から解放されるのだ。ここに「法」とあるのは「権能」と解すべきだ。権能は法に必ず付随するものだ。この場合においては、生命の霊の権能によって罪と其の結果である死の権能から解放されたと解して、意味は明白になる。また「解放される」ではなく「解放された」だ。パウロは過去においてある明

確な体験として、聖霊の降臨による罪念消滅の恵みに預かったのだ。

○第三節、第四節は難解な二節だ。言葉は簡単であって意味は深遠だ。これを残らず解説するには福音全部の説明が必要だ。キリストの受肉、その受難、復活、昇天の意味を明らかにしてこの両節の意味が分かるのだ。しかし今ここにそのような説明をすることはできない。また行う必要もない。しかしそのような説明をしなくても、その根本の意味を探る道はあると思う。キリスト教は罪をどのように見るか。その事が分かって、これら両節の意味が明るみに出ると思う。有名な英国の説教者ドクター・ジョエットの言葉を借りて言うならば、罪は爆発であり、腐敗であり、分裂だ。罪は悪のほかに爆発したものだ。しかしながらその原因は内なる心の腐敗にあり、そして腐敗にもまた原因がある。それは分裂だ。神に対する人の関係が分裂して、ここに心の腐敗が始まったのだ。ゆえに罪を去ろうと欲するならば、腐敗を除かなければならない。腐敗を除こうと欲するならば、神との分離を正さなければならない。罪の原因をここに発見しないで、その刈り除きを講じるも無益だ。アンド、神がその御子を罪の肉の形として罪祭の犠牲として遣わし、その肉において罪を罰せられたというのは、罪をその根本において断つためであったに違いない。神の執られたこの道の説明はこれをなすに難くある。しかしながら、その目的がここに在ったこと、そしてこれによって私たちの罪が実際的にその根本において断たれることは、信者の体験として疑う余地がない。キリストの御生涯によって神と人との関係が正され、ここに両者の間に交わりの道が開かれ、キリストを通して生ける神の霊が死んだ人に伝えられ、その結果として人が罪と死から免れるに至るというのが、キリスト教の根本的教義だ。そしてこの教義を明白にかつ簡潔に伝えた者がローマ書八章三、四

節だ。難しいと言えば難しくある。深いと言えば深くある。しかしながら、福音の真理の明白なる記述として意味は最も明瞭だ。ここにパウロが記した言葉そのままが大真理だ。これを解し得ないのは、言葉が解し難いからではない。私たちの心が罪に汚れて、その明白な意味を受け取ることができないからだ。聖霊に従う者の目には一目瞭然であるはずだ。

〇人は神を離れて罪の状態にあった。キリストは二者の間に入り、その分裂を癒やし、神が人に臨み、人が神に至る道を開いてくださった。ここに於いてこそ、神の霊が人に通じて、人は神の御心を行うことができるに至ったのだ。